

シネマパラダイス



美浦村企画財政課

林 浩 子

記憶の糸を遠くたどって行くと、その映像はくっきりと心に浮かびあがる。白黒の画面、幼い少女、井戸そして水…。小学校6年生だった私の心を感動で震えさせたのは、映画『奇跡の人』であった。あの時受けた衝撃にも似た、胸がしめつけられる様な思いは、とにかくどう表現して良いかわからない。ヘレン・ケラーの伝記は読んでいたので内容は知っていたが、私はもうすっかり映画の中に入ってしまったに違いない。涙でぐちゃぐちゃの顔で、しばらくは茫然としていたのを覚えている。

それ以来、私は映画を見るのが好きになった。といっても、有名な外国俳優の名前も知らないし、何本もの映画を見ているわけでもないの、映画ファンとまではいかないのだが……。

映画は暗闇の中の祭りである。という日本の名監督の言葉通り、あの臨場感や迫力はテレビでは味わう事が出来ない。また、現実では絶対に有り得ない事が起こってハッピーエンドになったり、素敵な偶然が待っていたり、様々な非現実的な世界へ導いてくれる。また、映画の中で時折飛び出す洒落たお喋りも、私が楽しみにしている一つである。勿論、これは外国映画に限られるが、日本人には照れくさくて言えない様な事をすらすらとスマートに、それもさりげなく言っている。そうした自分のまわりでは経験出来ない事を映画の中で感じられ、ライフスタイルや価値観の違いなどを改めて痛感したりもする。

思えば自分は、人間が単純にできているのか、その気になりやすいたちなのか、映画を見ているとすぐに主人公の気持ちになって一緒に空を飛ん

だり、笑ったり、泣いたりしてしまう。高倉健のやくざ映画を見た後、肩をいからせて映画館を出て行く人の気持ちがよくわかるのである。自分自身の日頃の生活が比較的単調であり、仕事も超現実的で想像性がないものであるからこそ、私は映画の主人公になりたがってしまうのかも知れない。ある意味では、それは現実逃避なのだろうか？

しかし、自分のストレス解消法を知っていて、それが心の栄養剤になっていけば精神衛生上とても健康的だし、私の場合、ストレスがたまって重苦しさを感じたら良い映画を探して見れば解消するのだから、いたって簡単である。

これからも素晴らしい映画をたくさん見て、心の中の写真のないアルバムに飾っておきたい。ただ、どんな素敵な映画でも日々を重ねていくうちに色あせてしまうものだと思う。それでも、いつしか心の中ではもうセピア色になってしまった映像が、ふと頭の中をかけぬけ、映画の主人公になりきって、ドキドキ、ワクワクしている自分をなつかしく思い出す時があるかも知れない。



経 済 動 向

国内の動き

●円安，長期化の様相

円の下落が長期化の様相を強めている。円の下落傾向に当面変わらないと市場がみている最大の原因は、日本の資本流出。経常黒字が縮少する一方で、不動産投資など海外への直接投資が急増している。日本の構造的なカネ余り現

象が続く限り、「資本逃避」ともいえる日本からのカネの流出は止まらない。市場のドル需給でみれば大きくドル不足に傾き、ドル買いが勝る構図が出来あがっているためである。(日経 3月13日付)

●設備投資計画，変更なし

株式相場の急落を背景とするトリプル安傾向に依然止まりがかかっているが、民間設備投資動向を左右する電力、鉄鋼、自動車、電気などの主力産業界では、今のところ、90年度の高水準の設備投資計画について「見直す必要はない」とする企業がほとんどだ。今年後半以後はトリプル安

の影響があらわれ、企業の資金調達力や高額品を中心とした個人消費の勢いが鈍化することを懸念しているものの、長期的な経営戦略として「合理化改善や新製品研究、新設備導入などは続けていく」としているからだ。

(日経 3月23日付)

●公示地価，二重構造の地価連鎖

大阪、近畿圏の急騰と地方都市や周辺地域への上昇拡散、そして東京圏の再上昇——ことしの公示地価はこの3点に特徴づけられる。上昇率が前年は30%台、ことしは50%を超えた大阪圏の動きは、87~88年の公示地価に表われた東京の地価高騰の再現ともいえるし、地方中核都市での値上

がりも、地価上昇の地方への飛び火が防げなかったことを示している。また東京圏の再上昇は次の高騰の波の到来につながりかねず、地価が全国で連鎖的に上昇する実態が明らかになった。(日経 3月23日付)

県内の動き

●「頭脳センター」、民間研究部門集積を支援

頭脳立地法の適用に基づき茨城県などが県北の常陸那珂地区に設置する第三セクターの産業支援基盤施設(いわゆる「頭脳センター」)の内容が固まった。国際化や情報化などの進展に対応して中小企業を中心とした製造業の2.5次

産業化を進めるとともに、産業の頭脳部分に当たる民間企業の研究部門などの集積を支援する。茨城ではこの種の施設はつくば研究支援センターに次いで2ヶ所目。頭脳立地法に基づく施設としては初めて。(日経 3月14日付)

●茨城へ工場進出148件

茨城県内への企業進出が依然として高水準を続けている。茨城県が3月17日発表した平成元年の県内工場・研究所立地動向(敷地面積1000㎡以上)によると、立地件数は148件で関東通産局管内(1都10県)中3位、敷地面積は289.9ha

で1位となった。首都圏にありながら地価が安く、常磐自動車道の整備や特急「スーパーひたち」の登場で都心への時間が短縮していることなどが人気の理由とみられる。

(日経 3月18日付)